

# 戦えない天翼種

竹闇

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主の加護を以てしても修復不可能だった片翼の天翼種がいる。なら、一人ぐらい壊れた天翼種がいてもおかしくないはず。

これは形状維持に精一杯な天翼種のお話。

# 目次

原作開始6407年前

1



# 原作開始6407年前

## 天翼種

『ノーゲーム・ノーライフ』に登場する戦神アルトシュによって作られた神殺しの尖兵。幾何学模様を描く光輪を掲げ、大戦ではそれぞれの種族の首にレア度を付けて競い合いをしていたデータラメ種族の一つだ。

存在そのものが生物の形を持った魔法のようなものであり、根幹術式から始まり全てが「魔法」で出来ている。

そのため基幹術式さえ無事なら、記憶や人格は残らないものの、身体が消失した状態からでも再起動できる。

しかし基幹術式が破損した場合はどうなるのだろうか。

基幹術式  
『核』はアルトシュに編まれた神域の術式。そう容易く壊れはしない。

だが上位種相手では分が悪く、大戦では何百もの天翼種が散っていった。壊れるという事は完全ではないということ。つまりはバグる可能性があるということだ。

例えば『四番個体』ラファイル。

ただ一度の神を討ち滅ぼした戦にて、主の加護を以てしても修復不可能な傷を負った

勝利の立役者。

映画でも出てきたあの子のように、怪我をしたままの天翼種がいてもおかしくはない。そしてこの世界では、また新しい天翼種が修復不可能の傷を負った。

「あわわわ……ヤバいですよ。基幹術式が壊れちゃってます……」

燃える大地でそう呟く天翼種が一人。

彼女は幼い身体で頭上の欠けた光輪を見上げて絶望していた。

「みんな、あつ。ちよつと待つて下さい！ 置いて行かないで!!」

天を見上げて見えたのはアヴァント・ヘイムに帰還していく仲間たち。

龍精種との戦によって傷を負った子を無事だった天翼種が空間転移させてゆく。

「あれ？」

『天撃』を撃った上流れ弾を喰らって死に体の身では身体を維持するのが精一杯だった彼女、イヴリールは光槍を信号弾代わりに打ち上げようとしたが、それに意識を移した瞬間、身体を構築する精霊が制御を離れ、虚空に溶け始めた。

「えっ。まさか今のもアウトですか。これで形状維持に支障をきたすとか正直やつたら

れませんよ……」

イヴリールはその事実<sup>ト</sup>に絶望しながら愚痴をこぼす。

これでは空間<sup>ト</sup>転移なんて夢のまた夢。恐らく使った瞬間、形状維持に使っている精霊が制御を離れ四散。『核』もそれで開いた穴から崩壊する。

「とうかこの分だと自然回復できるかも分かりませんね。今のままだと獣人種にも負け……いや、空を飛べるなら大丈夫ですよ。やってみましょう」

そしてイヴリールは少し身体を浮かせて理解した。

——あ、これダメなやつだ——と。

「いや、フワフワ浮くのが限界ってマジでヤバいです。アヴァント・ヘイムの高度まで一日以上ぐらいかかりますよこれ……」

アヴァント・ヘイムに帰るは絶望的だ。

一日中空を飛んで他種族に補足されないなんてほぼ有り得ない。そもそもアヴァント・ヘイムも移動している以上、ただ見つけて追いかけるだけじゃ追いつけない。

仲間に拾って貰おうとしても、他種族にバレず拾って貰うなんて不可能だろう。

(例えば、生まれてこの方自分の力で上位種の討伐に貢献したこともないです。やったことと言えば雑魚の掃討と今回龍精種に『天撃』を当てただけ。効いてなかったですけれど。それで撤退もできずこの様だなんて、天翼種の恥晒し以外の何者でもないですよ

……)

そう結論付けたイヴリールは未だ赤く染まる大地に思わず膝をつく。

「ぼ、僕はアルトシユ様に創られ……創られたのに何の役にも立てず惨めに生き残る僕は何なんでしょう。そもそも『核』が壊れたのに生きている時点で今の僕は天翼種と言えるんでしょうか……うう、これからどうしましょう……」

その思考は既に天翼種のそれから外れていた。

これからどうするか辺りの残留精霊が薄れるまで悩んでいたイヴリールは、辺りの目隠しが消えたことでようやく我を取り戻した。

「よく考えたらこんな事を考える時点でアルトシユ様の不興を買いますよね。〃百考は一般に如かず〃。まだ生きてる以上首を取れる可能性はあるはずです。待ち伏せして背後から首を一撃、死を覚悟して魔法を使えば〔レア1〕、いや〔レア2〕はいけます！」  
もう助けが期待できず、考えるのが面倒になったイヴリール。

精霊反応が出る以上、展開されているか分からない『防護術式』に『自動修復術式』もどうにか停止させている。

「ちよつと服を着てないみたいで恥ずかしいですが、僕の最後の戦です。頑張りましよ



う

「彼女は修復術式を起動できる場所、戦える相手を求めて、当てのない旅を始めるの  
だった。」